

「アアアアアア!?」

オイラは絶叫した。なんたつて恐ろしい夢を見たんだ。

男なら誰でも想像したくないアレが、目の前で延々と繰り返されるという、今のオイラが考え得るかぎり、最悪の夢でヤンス。

「ここは……?」

目が覚めたその先に広がるのは、オイラが知っている光景ではなかった。真っ白の壁、真っ白のベッド。真っ白の布団、薬品めいたにおい。……ん? あれは窒素缶でヤンスか? 空気中に八割くらい含まれてるでヤンス。そんなことはどうでもいいでヤンス。人の気配がなく、やけに無機質な空間——ああ、病院、でヤンスか。でも、なんでオイラが? ……心当たりは、あるにはあるでヤンス。練習試合の帰り、いつもの横断歩道を渡ろうとした瞬間、トラックがいきなり曲がってきて——……そこから記憶がない。と、いうことはマンガでありがちな『数日間気を失っていた』というパターンでヤンスね。こういうときは、たいていママかアニキがオイラにぴったりくっついてるものでヤンスが……あれ?

「まあ、いいでヤンス。オイラが目覚めたのを知れば、涙の感動展開が「むおおおおおおおおおおおおおおん！」

心臓が止まるかと思つたでヤンス。いや、ここまで来て死んでたまるかでヤンスと、オイラは奇声とともに扉を破壊して入ってきた筋骨隆々の男性（本当に無駄にマツチョでヤンス）に叫んだでヤンス。

「だ、誰でヤンス!？」

「俺は達也。ハチベエ、君の子孫だ」

し、子孫だつて——————————!？」

「し、子孫!? オイラいつのまにそんなことに、だつてオイラまだ中学生でヤンスよ!? キスもしたことないのに」

「正確に言えば、君の従弟・キュウベエの血筋だ」

「ああ、キュウベエがオイラより早くパパになるなんて……じゅ、十四歳のパパなんてシヤレにならねーし、ただのクズでヤンスよ。というかどうかということだかわからないでヤンス。混乱してきた」

「ずばり説明しよう! ハチベエ。ここは君が生きていた年代から二百年ほど先の未来なんだ!」

「ゲエ!」

意味がわからないでヤンス！ そんなの信じられるかでヤンス！ ……けれど病室の窓から見える光景は、オイラの知っているそれではなかったし（まるで近未来を題材にしたゲームの背景そっくりでヤンス！）、子孫と名乗ったこの無駄にマツチヨな達也と名乗った男がオイラに嘘をついて得をするようなことは、たぶん、ないでヤンス。あつたとしても、今のオイラにわかるはずがない。

「君は、君が意識を失った直後に開発された『バイオ窒素式コールドスリープ』の被験者だったんだ。予定していた百年をすぎても君が目覚めないから、プロジェクトは失敗かと思われたんだが……」

「え、放置されてた、つてことでヤンスか」

「まあ、その、うん。でも君はバイオ窒素の助けを借りず自分の力だけで見事目覚めた。これは勲章モノだと思うよ」

「そ、それでヤンスか……？ で、でも二百年後の世界ってことは……オイラのパパもママもアニキもダチも……皆残らず死んでしまった、つてことでヤンスよね？」

「………ああ、つらいだろうが、そうだ。だ、大丈夫！ 国を挙げて君をサポートする体制ができているから、そ、

そういう面では………、うう、申し訳ない」

達也はその巨体を折り曲げ、非常に申し訳なさそうな表情を浮かべた。見れば、額から脂汗が滴っている。

……悪い、奴ではないようでヤンス。たぶん。

「達也。オヌシがそんなことを言う必要はないでヤンスよ」
「だが……」

「そもそもオイラは、一度死んだようなものでヤンス。あの日、野球の練習試合の帰りトラックに轢かれて……」

「それ以上いけない」

「えっ」

次の瞬間、オイラの口は鬼気迫る表情を浮かべた達也によつてふさがれていた。

「もが!? もががががががががががががががが「やきゅ……とは前世期末に滅んだ退廃的遊戯。その名を発音することは法律で固く禁じられている。危ないところだったな、誰かに聞かれていたら俺も君も厳罰を受けるところだった」

「なんで野球みたいな普遍的なスポーツが禁じられなきゃならないでヤンス!？」

やつと解放されたオイラは、反射的にそんなことを怒鳴

つてしまっていた。しまったと気づいたときにはもう遅く、
「バカかーッ！ さつき発音すんなって言っただろ！ ……
…ヤ、キウだ。やきゅ…ではない。二度とその名を口に
出すな！」

「そんな…そんなこと、いきなり言われてもオイラの身
体に染みついたやきゅ…への愛が…」

そんなオイラの様子をしばらく見ていた達也だったが、
急に立ち上がり、黙ってベッドのわきに置かれていたモニ
タのスイッチを入れた。

『あああああああああああああああああああああ』
ほげ!? なんとということでヤンス！ モニタに映し出

されたのは、さつきみた悪夢同様——今にも去勢されそう
になっている、一人の男だった。

「君もああなりたいのか」

『去勢！ 去勢！ ワアオ！ 去勢！ 去勢！ 去勢スト
リーム！ 睾丸グッドバイ！ ノックスノックス！』

恐怖で身をすくめる男に対し、周りを取り囲んだ無駄に
筋骨隆々とした男たちは、まるでサンバでも踊るかのよう
な異常なテンションで、窒素缶を振り回している。ヒエッ！

ま、まさか、アレを噴きかけて急速冷凍して切落と…!!?
「これが去勢ストリームだよ。禁忌の遊戯・やきゅ…に
触れた者は皆ああなるんだ。ミセシメ・チャンネルで二十
四時間全国民に中継されている」

「そ、そんな非人道的な刑罰があつてたまるかでヤンス！」
「非人道的なわけじゃないじゃないか。プロヤークウ闘士と見
込みがありそうな者以外は去勢ストリームされるんだ。常
識だぞ? ……まあ成人を迎えた時点で微罪でもストリー
ムされるから、現在の世界における去勢済みの人間の割合
は——だいたい空気中に含まれる窒素くらいかな」

!!? 七十八パーセントもの人たちが!?

「そ、そんなの…じゃ、じゃあ達也は…?」

「俺はプロヤークウ闘士だからね、去勢されていないよ」

プロヤークウ闘士? プロ野球選手のことだろうか。だ
つたら、無駄に筋骨隆々なのもうなずける。ということは、
オイラは今、憧れのプロやきゅ…いや、ヤークウ闘士を
目の前にしているということかヤンスか!?

「プロやきゅ…ヤークウ闘士!? すごいでヤンス!
まさかオイラの子孫がプロになっているなんて!」

「——ああつ、しかし！　しかしだ！　俺も次の試合に勝たなければ……あのストリームの餌食になつてしまうんだ！　アイワナ去勢！　ウイルビー去勢！　ハーバーボツシュ・ワアオ！」

「な、なんということでヤンス！　プロヤーキウ闘士は必ずしも去勢されないわけではない、つてことでヤンスか？」
「ハチベエ。君はこの世界の根幹をまだ理解していないようだね」

重苦しい口調で達也はつづける。

「強者には栄光を！　敗者には死よりも酷な屈辱を！」
その昔、大宇宙の支配者として地球に降臨なさつた聖アガがおつしやつた言葉さ。俺はプロヤーキウ闘士。強者と認められた存在。強くありつづけられる間は、去勢されない。しかし一度負けが込めば……去勢不可避！　我がヤーキウチームはライバル相手に二百連敗している。そりや俺だつて去勢されたくないさ、しかし聖アガの名は絶対……「どう考えてもそのアガとかいう邪神が、人類を根絶やしにしようとしているだけでヤンスがそれは」
「シャラー……ッ！　聖アガは絶対神！　そ

の名を貶しめるならばハチベエ！　たとえ君が俺の先祖であつても、今ここでセルフ去勢させることを辞さない！」

「ヒイツ!?　い、言わねーでヤンスよ！」

服を脱いだオイラがすごい勢いで裸土下座を繰り返すと、達也は深くうなずき、オイラを立ち上がらせた。

「何も君を殺りたいってわけじゃないんだ。俺にだつて人情はある。そうだ。君はヤーキウに興味はないかい？」

ある。もちろんある。オイラが生きていた時代（もちろん今も生きてるでヤンスけどね）、皆に愛され親しまれていたやきゅ……ヤーキウと名前を変え、どう伝わっているのか——不安はあるが、興味はあるでヤンス。

「もちろんあるでヤンスよ」

「よし、そうと決まれば出発だ！　さつそく球場へ行こう！　今夜の試合に向けて皆がそろっているはずだ！」

「えっさつそく今夜に試合でヤンスか!?　それなら早く行かないやでヤンス！」

ということは、達也は今夜の大事な試合よりも（去勢されるかどうかの瀬戸際でヤンス！）オイラの目覚めを優先させてくれた、ということだ。達也はおひとよしす

ぎるでヤンス！ これは今夜の試合、なんとか勝たせてやらなきや、不肖ハチベエ、男として通せないでヤンスね……！

・・*

「やっぱりカプーズがナンバーワン！」

「やっぱりカプーズがナンバーワン！」

球場に到着し、真つ先に目に飛び込んできたのは、スタンド席で舞い踊る美少女たちだった。オイラ、度肝をぬかれちまった。なんて整った顔立ちでヤンス！ まるでお人形みたいでヤンス！ こんなチアガールが居たら、オイラ、ホームラン絶対打ちやうでヤンスよ！

「はえくすんばらしくかわい子ちゃん揃いのチアガールでヤンスね！うちの中学とは大違いでヤンス！」

「ははは、それもその通り。適性のない者は、バイオ食肉工場で処分されているからね。今この地球上に居るのは美しい個体ばかりさ」

「なんだか恐ろしいことを聞いた気がするでヤンスが、聞

かなかつたことにするでヤンス！

「それより達也、オヌシは『カプーズ』というチームに所属してるでヤンスね」

「ああ、そうさ。栄光ある市民球団カプーズ。俺は去年、ドラフトで一位指名を受け入団したんだ」

「はあ、なるほど。ドラフトという制度はまだ残ってるでヤンスね。それにしてもカプーズ……？ なんだかオイラの知ってる球団にも似たような名前のチームがあったような……」

「しかしいつも資金難で、給料はなんと、時給六百円。これならバイオコンビニのバイトでもやった方がマシさ」

「ろ、六百円!? オイラのアニキが金欲しさに出演したAVで貰った給料の百分の一でヤンスか!? (ちなみにオイラのアニキは、その後天性を見出され今じゃ押すに押されぬ人気男優でヤンス！ 家族の誇りでヤンス!)」

「でも俺はいいんだ。大好きなヤークウがつづけられるなら、金なんて、どうだっていい……問題は——圧倒的に勝てないということだ！ それもしかたがない、有力闘士が皆、ジャイアンズに流出してしまったのだから……」

「ジャイアンズ!？」

「……オイラ、この球団に関しても似たような名前のチームを知ってるでヤンスよ！ でも突っこまない方がよさそうでヤンスね！」

「正式名称、『極悪非道ジャイアンズ』！ 金にまかせて優れた闘士をかき集める球団さ」

「自分たちからネガキャンしていくのか（困惑）」

オイラのつぶやきをよそに、達也はいそいそとグローブを取り出した。キャッチャー用のものだ。ここまで面喰っていたオイラだったが（やっぱり二百年の歳月は常識を変えるでヤンスね……）、見慣れた道具が登場したことで少しだけ、ほっとした。

「このグローブは二千円もしたんだ。今は使っていないが、昔、給料を貯めて買ったものでね……ほんげッ!？」

「ほんげ？ ……ってああああ!？」

おお！ なんとということでヤンス！ 達也のグローブが見るも無惨、粉々に砕かれてしまったでヤンス！

「ああーッ！ 貴様らは！」

達也が指さした方向……球場入口には見たこともないほ

どスタイリッシュなスポーツカーが停まっていたでヤンス！ しかも驚くべきことに二人乗り、いやせいせい四人くらいしか乗れなさそうな形状のくせに、二十人くらいマツチヨが飛び出してきたでヤンス！ 物理法則狂ってやがるでヤンス！

「貴様はジャイアンズのヤーキウ闘士だな！ なんてことを！」

「そういう君は達也。どうしたんだい、そんなボロツちいゴミを抱えて」

降りてきたまーた無駄にマツチヨな男は、芝居がかった調子でそう告げた。あっ！ ショットガンを抱えている！ 達也のグラブを壊したのはこいつでヤンスね！ ヤーキウ闘士という名のスポーツマンの（はず）なのに、相手の大切にしている道具を壊すなんてなんたる卑怯者でヤンス！

「ゆ、ゆ、ゆ、許さん！ よくも俺のグラブを！」

激高した達也が殴りかかろうと、拳を振り上げた。それはだめでヤンス！ 相手の思うツボでヤンスよ！

「だ、だめでヤンスよ！ 試合前にケンカなんかしたら、後に障るでヤンス！」

「そうだよ、達也。ボクもその子と同じ意見だな」

「伶俐な声に思わず振り返るとそこには、

「お、お前は……！」

「すっげえかわいい子ちゃん！」

高身長茶髪ボブ猫目美少女！ 好みど真ん中でヤンス！
さっきのチアガールの仲間かな？ それにしてはなんとなくただならぬ雰囲気でヤンスけど……？

「サダ、俺たちカプーズナインの前に、よく顔を出せたもんだな。お前が居なくなってから、俺たちは……」

ん？ 達也の知り合いでヤンスか？ 名前はサダさんというようでヤンスね。これは名前を聞きだす手間を省けたでヤンス。ラッキー！

「……………行こう」

「おい待てよ、サダ！ 何か言うことあるだろ！」

「ヘーイ、そこのかわい子ちゃん！ オイラに連絡先教えてくれでヤンス！」

「……………」

サダさんは冷たい目でチラ、とオイラを見やると、ニヤニヤ笑っているジャイアンズのヤーキウ闘士と行ってしま

ったでヤンス。

「ふむ、なかなかつれない態度でヤンス」

「サダ……あいかわらず、ジャイアンズの奴と……」

「ん？」

達也がふるえている。寒いでヤンスか？ いやそんなことは……目が、血走っている。ああ、理由はわからないでヤンスが——どうも達也は怒り狂っているでヤンスよ。

「達也」

声をかけると、ギロリとにらまれた。さすがプロヤーキウ闘士、なかなか迫力あるでヤンスな。けどびびっているようじゃ、さっきのかわい子ちゃんの連絡先を聞き出すという目的達成には程遠いでヤンス。

「オヌシ、何を怒っているでヤンスか？ 話せば楽になるというでヤンス。ここは何のしがらみもないオイラに話してみるでヤンス」

しばらく達也は黙っていた。時間にしておよそ三十秒。その間オイラはじっと待っていた（でも近くで応援練習しているチアガールがパンチラしないかとチラ見していたことは内緒でヤンス！）。

「サダは……サダとは一年前まで、カプーズでバッテリーを組んでいたんだ。俺が捕手、サダが投手でな！」

!? 予想外すぎる答えでヤンス!

「な、なんだってー! あのかわい子ちゃんが、でヤンスか!? あんな細腕で投手なんて……」

「しかもそんなじよそこの投手じゃない! これを見てくれ……俺たちがバッテリーを組んでいた頃の新聞記事さ」

達也が懐から取り出したのは、ボロボロの新聞記事だった(この時代にまだ紙媒体が生き残っていることは、なかなか興味深いでヤンスね!)。

『カプーズ・サダ、見事なノーパン投球! 観客絶賛!』

「ノーパン投球? だまされしないでヤンスよ。それはゲスなスポーツ新聞がよくやる手でヤンス。アイドルとか綺麗なところが始球式で見事投球をやりおさせたとき、スケベな読者に“ノーパン投球”と誤認させるために、わざと“ノーパン投球”と略して書くのでヤンス!」

「いや、投手は皆ノーパンだろう。何を言ってるんだ、ハチベエ」

意味がわからないでヤンス!

「そんなこと、何の意味があるでヤンスか!? もし打球が当たったりなんかしたら、ヒエッ! 大怪我でヤンス!」

「自分を危険に晒してこそ強者の証。もといチームの士気を上げる行動だろう? 聖アガガもそうおっしやっている」

「だめだこいつ頭おかしい。で、でもいちいち突っこんでたら話が進まないでヤンス。ここはオイラが大人にならな」と。

「そ、それでヤンスか。勉強になるでヤンス」

「話を戻そう。サダは本当に優れた投手だったんだ。カプーズの救世主として期待されていたんだよ。監督に聞いたら時給も三万円以上あったらしい……ムカつく……それなのにサダはなぜだかある日、セルフ去勢し、あろうことかジャイアンズに奔ったんだ……」

「セ、セルフ去勢!? それはつまり……文字通り自分で」「ああ。そうだ。なぜそんな気のふれた行動をしたのか、今でも理由ははっきりしていないが……この前、街で市民に悪い噂を聞いたんだ……」

「悪い噂……」

——元カプーズのサダ投手、アレはもうジャイアンズの情婦イロになってやがるぜ。

「そんな、そんなことって……」

「ああ、最悪だろう!? 勝手にチームを出ていった挙句、あろうことかライバルチームに身を沈めるなんて！ 中学時代からのつきあいだが、俺はもうサダに失望しきってる。奴はヤーキウ闘士として以前に、人間性に問題大アリの大馬鹿野郎なんだ！」

あ、あのど真ん中ガールが、元・男でしかも敵方の情婦おちに陥落おちしているだなんて……ちょっと興奮した……なんだか変な性癖に目覚めそうでヤンス……。

「今日の試合、おそらくサダは来るだろう。情夫であるジャイアンズの奴らの応援と、試合後行われる俺の去勢を見物するためにな！」

「……今、『試合後行われる俺の去勢』と言ったでヤンスね？」

「ああ、言ったさ。どこか間違っているか？ ないだろう」

「間違いまくり、でヤンスよ。試合に勝てば去勢は行われないでヤンスよね？」

「……………!」

「達也はもうあきらめているでヤンスか？ オヌシ、自らの尊厳を守ろうとは思わないでヤンスか？」

がし、と達也の胸倉を掴む（実際は頭二つ分違う相手だから、まるでキッスをねだるみたいな体勢になっちゃったでヤンス！ オーマイガー!）。

「オイラはあきらめてほしくないでヤンス！ オイラの時代のやきゅ……選手はどんな状況の試合だって、あきらめることなく戦い抜くでヤンス！ ヤーキウ闘士は違うでヤンスか？」

オイラの言葉に達也ははつとしたのか、三度もまばたきをした。

「たとえ九十九パーセント向こうが勝つとしても、一パーセントはこちらに残されてるでヤンス。もし最初からあきらめてしまうのなら、全ての可能性を敵に引き渡すことになるでヤンスよ」

「確かにジャイアンズとの戦力差を考えると、厳しい戦いになるだろうが……俺は、あきらめないぞ……」

顔を上げた達也はまったく別人のように輝いて見えた。

「その意気でヤンスよ！ さ、練習をはじめるでヤンス！」
「ああ！」

グラウンドに走り出していった達也が、ふと足を止め、
くるりとこちらを向いた。

「ありがたいなハチベエ！ おかげでふっきれたよ！」

「どういたしましてでヤンス！ お返しに最高のプレイを
見せてくれでヤンスよ！」

「ああもちろんだ！」

・・*・*

——四時間後。いよいよ達也の運命を決める戦いがはじ
まった。オイラは特別にカプーズベンチに入れてもらって、
試合を応援することになったでヤンス。

「さーで最初に紹介しますのは、おなじみジャイアンズの
白銀の弾丸・○○闘士……彼は年間打率三百割二分三厘を
誇っており、出塁率は皆さんご存知、リーグトップの五百
パーセントを誇っております……」

仰々しい文句とともに、無駄にマッチョなジャイアンズ

の闘士たちが愛想よく手を振りながら、目の前を行進して
ゆく。

「達也、これは何でヤンスか？」

「闘士紹介だ。主にバイオお茶の間で応援している視聴者
のため行われている」

「出てくる数字が、プロレスの煽り並みにおかしい気がす
るでヤンスが……？」

「そうか？ 普通だろ」

「お次に参りましたのは、薫煙熾天使・○○闘士！ 彼の
バント成功率はなんと驚異の六千パーセント！ さすがミ
スター・極悪非道ジャイアンズと称されるだけあります」

「……ジャイアンズの闘士はなんで皆、数年後、枕に顔埋
めてバタバタしちゃうような二つ名がついてるでヤンス
か？」

「理由は知らんが色々あるぞ。『魔弾の射手』『佞姦邪
知』『誰とも知れぬ者』『彼岸夢見』『殺戮人形』『紅い
悪魔』『ヤーキウだいすき』」

「一つだけいふんと異色でヤンスね……」

試合開始を告げるサイレンが鳴った。

「じゃあ行ってくるぞハチベエ！」

「行つてらっしゃいでヤンス！ オイラはここでオヌシの
応援を——……」

ガキーンッ！

「ンアッー!?」

次の瞬間聞こえてきたのは、痛々しいほどに鼓膜を揺さぶる金属音。音の大小はあれど、オイラはこの音を嫌というほどよく知っている。加えて球場全体が山鳴りのようにどよめきふるえるという反応。そんなまさか……。

「出ましたアーツ！ 試合開始早々、観客を爆撃するホームラン！ ジャイアンズの得点です！」

爆撃、という陳腐すぎる表現に思わず失笑しかけたオイラだったが、コンマ数秒もしないうちにその正しさを思い知るようになった。ジャイアンズ闘士が放ったホームランの着地点——レフト側スタンド（カプーズ側応援席）に業火が燃え広がっているでヤンス！

「もうホームランを打つただと!? 卑怯だ！」

マウンドに到着した達也がわめいている（達也は投手だったんでヤンスね、捕手↓投手の経歴のやきゅ……選手つ

て誰か居たっけでヤンス）あれ？ でもおかしいでヤンス。

どうして投手が居ないのにホームランが打てるでヤンス？
そもそも試合は開始されてなかったでヤンス！

「おい卑怯者！ まだサイレンは鳴り終つてなかった
ろ！」

いいぞいいぞ達也！ こういうことは遠慮せず、ちゃんと抗議すべきでヤンスよ！

「ん？ すでに試合ははじまっていたが？」

達也の剣幕を意に介さず、ジャイアンズ闘士はそんなことを言つてすつとぼけている。ふざけるなでヤンス。

「カプーズの闘士どもが守備位置につくのが遅いから、俺の【ザ・ドープ・シヨウ】で発破をかけてやったまでよ」

「くっ、やられた！」

途端に達也がマウンドに崩れ落ちた。

「で、出たーッ！ 【ザ・ドープ・シヨウ】だ！」

実況のアナウンサーまでそんなことをわめいている。なんだそのザなんとかって……。

「ああ、初回から発動されてしまうなんて……」

「もうおしまいだあ……」

すぐそばで恐慌を起こしかけている控え闘士たちに尋ねる。

「ザなんとかってなんでヤンスか!? そもそも今、何が起こってるでヤンスか!?!」

「ああ、君は……確か、達也の先祖の……」

「ハチベエでヤンス。今はそんなことはどうでもいいからさっきの質問に答えてほしいでヤンス」

【自動本塁打生産】というのはね、ジャイアンズ闘士（異名…白銀の弾丸）固有の能力で—— // 投手が居なくても自分で球を生成し、スタンドへの爆撃（//ホームラン）を行うことができるんだ」

「な、なんだってーッ!」

「ちなみに能力には発動限界回数があつてね、確かあの闘士の場合は一試合につき、三回」

「そんな! じゃ、じゃああのマツチヨが試合に出るときは、最低三点は向こうに入るといふことでヤンスか!?!」

「そういうことさ」

「ま、まあそれでも満塁ホームラン打てばなんとか勝てるでヤンスよダイジョーブダイ // ジャイアンズに三千点! //」

ファツ!? さんぜんてん!?

オイラは耳を疑った。だがなんといふことだろう……次の瞬間には、試合結果を示す電光掲示板にはジャイアンズの得点欄に三千と表示されていた!

「そ、そんな……なんで一発のホームランで三千点だなんて……おかしいでヤンスよ……」

「……しかたがないよ、ハチベエ。審判は完全にジャイアンズに買収されてる。最近ではアンパイアじゃなくてジャパパイアと揶揄されてるくらいなんだから……」

達也を含めたグラウンドのカプーズ闘士は、動揺しながらも何も反論しないままプレイをつづけている。やきゅ……の場合、審判の判断は絶対。それはヤーキウも同じ、ということでヤンスか!

「そ、そんな……あんな滅茶苦茶な調子で点数が入ったとしたら、勝つのはかぎりなく難しいでヤンスよ……」

「ちよつと待ちんさい!」

「ヒッ!?!」

球場全体に響くような大音声とともに登場したのは—— どう見てもヤク、その筋としか思えない方たちだった。た

つた九人だが、威圧感がバナイでヤンス！

「な、なんでヤンスか、あの人たちは!? 神聖な試合の邪魔なんて許されないでヤンスよ!」

「よく見るんだハチベエ! あの方たちはカプーズファン……もとい一般の市民だぞ!」

「ずいぶんと仁義なさそうな市民たちでヤンスね……」

球場全体が異様な雰囲気に含まれている。ライト側のジヤイアンズファンはものすごい勢いでブーイングを飛ばし、(しかたがないでヤンスね)、対してレフト側のカプーズファンは「ガタガタ抜かしてつと^始し^末ごう」しちやるぞゴルア!」なんて怒鳴り返している。これじゃあまるで、ヤークウの試合じゃなくてヤク……の抗争か何かでヤンス……。――次の瞬間。親玉とおぼしき市民の一人が、マウンドに居る達也へと歩み寄った。ブーイングは最高潮に達する。

「達也!」

顔見知りなのだろう、声をかけられた達也はなつかしきうに一礼した。

「ヤークウ闘士が世に立つ以上は、他のヤークウ闘士の風下に立つたらいけん。一度舐められたら、終生取り返しが

つかんのがこのヤークウいうもんよ、のう。ましてやカプーズ闘士ならなおさらじゃ。時には命を張ってでもという性根がなけりや、レジエントといわれるようなヤークウ闘士にはなれんわね——のう達也。あんた、立派なヤークウ闘士になりんさい! わしらがあの世で応援してあげるけん!」

「アニキ!」

そのときだった。アニキと呼ばれた親玉——じゃなくて市民がサツと右手を上げた瞬間、構成員——じゃなくて市民たちが上着をいっせいに脱ぐ。腹にベルトのようなものが巻かれている……ああ、あれは!? ダイナマイトだ! 本当にこいつら仁義ないな! そして——呆然と見ているジヤイアンズ闘士に走り寄り、おもむろにがし、と抱きつき(ホ○かな?)、躊躇いなく腹に巻いた爆弾に点火したのだ!

「アアッ!」

グラウンドの各ポジションで上がる声、声、声! それと同時に爆音! そう、これこそ市民球団カプーズの誇る鉄砲玉・仁義なき市民たちによる攻撃であった! ひど

い！ ひどすぎる！ もっとやれでヤンス！

「フン、効かぬわ！」

しかしなんということでヤンス！ 一番仕留めるべき【自動本塁打生産】の使い手が必死に抵抗、親玉、いやアニキ的市民を投げ飛ばした！ いけない！ このままではジャイアンズの闘士を道連れにすることなく大死だ！

「ド腐れ市民どもが……」

アニキ的市民を投げ飛ばし、ぜえぜえ言いながらジャイアンズ闘士がニイと笑う。

「カプーズのようなイモに与せず、俺たちに味方してれば、今頃そんな惨めな戦法、使わずにすんだのによお……」
「……カプーズ闘士はイモかもしれないが、ジャイアンズの風下に立ったことはいっぺんもないんで……」

不敵に笑う姿が、バイオ掲示板に大写真になったその瞬間！

「!？」

「……最後じゃけん、言うとつたるがよ。狙われるもんより、狙うもんの方が強いんじゃない。そがなことしとつたら隙ができるぞ——……」

「あ、アアーツ！」

あわれ、次の瞬間、ジャイアンズ闘士は、点火された予備の爆弾を懐から取り出したアニキ的市民もろとも粉々に吹き飛んでいた！

「おお、見よ！ ハチベエ！ これがカプーズの誇る『市民』たちだ！ カプーズ愛に満ちていることがわかるだろう!？」

「お、おう……せやな……」

今や、静まりかえった球場には九つの白煙が立ち昇っている。

身を捨てた攻撃に、オイラは自然と頭を垂れていた。

・・*

仁義なさそうなカプーズファンたちの犠牲により、なんとかジャイアンズの初回攻撃はそこで食い止められた。

代わってカプーズの攻撃……、キラッ！ ん？ 何か光ったような気がしたでヤンスが……、

＃で、出たーッ！ リーグ新記録！ ジャイアンズ屈指の

速球派・〇〇投手がついに……百四十七を達成したーッ！
「ん？ 百四十七？ 投手？ 時速百四十七キロといったら、確かに速い球でヤンスけど、オイラの知ってるプロやきゅ……選手でもそんなにめずらしいレベルではないでヤンスよ？」

「何を言ってるんだ、ハチベエ。マッハ百四十七に決まってるだろ」

なんとということだろう、オイラの隣で打順を待っている達也はこともなげにでそう言いおったでヤンス。

「????????????????????」

えーっと確か戦闘機の限界速度マッハ3そこそこ？ だった？ かなでヤンス？ ……百四十七？ 理解不能！

理解不能！ 頭おかしいでヤンス！

「もしかしてさっきキラツと光った気がしたのが、投球動作だった、ということかヤンスか」

「気がしたも何も、がつつり投げてたじゃないかハチベエ」
マッハ百四十七を視認できるなんて……やつぱり達也も

なんだかねで人間やめちやつてるでヤンス……。

「そ、そんな球どうやって打てるでヤンスか」

「ブーンってきたらペチツとなった瞬間にシュツとしてパカーンとすれば大丈夫だ」

「表現が抽象的すぎてわけわかんないでヤンス」

カーン……。

「ああーッ！ なんとか食らいついていった！ カプーズ
〇〇闘士、マッハ百四十七の球に合わせてきました」

「す、すげえー！ で、でも、あれは……」

凡人であるオイラにも、その打球があまり思わしくない結果に終わるのが見えていた。だって先ほどのジャイアンズのホームランに比べると、あまりにも弱々しい金属音だったでヤンスから……。

「ああーッ！ カプーズ・〇〇闘士ピッチャーゴロに倒れた！ 一塁到達ならず！ 射殺！ 死亡！」

結果はあまりにも残酷なものだった。その闘士は突如出現したマツチョな男たちによって、液体窒素砲の掃射を受け、肉体をガチガチに凍りつかせて死んでしまったのだ！

「本塁へ生還できなかった者は、あのように処分される」

あろうことか達也はそうこともなげに言いやがった。

おかしい。あまりにもひどい。それまでオイラはヤーキ

ウとはやきゅ……とは違う点も（かなり、いやものすごく）あるが、れっきとしたスポーツであると考えていた。けどこれじゃあ……！

「ひ、ひどいでヤンス！ こんなただの処刑ゲームでヤンス！」

「何言ってるんだ、ハチベエ。これがヤーキウだろ」

「こんなの容認してたらたちまちチームが全滅してしまうでヤンスよ!? やきゅ……ヤーキウは九人でやるものでヤンスよね!？」

「大丈夫だ。ヤーキウは最悪、投手と捕手の二人だけでできる。なあに、全ては投手次第さ。たとえ打たれたとしても、球は投手が処理できさえすれば」

「外野フライも……でヤンスか？」

「ああ、もちろん。飛んでゆく球より早く走ればいい」

「えっ」

「さあ、もうすぐ俺の打順だ。しっかり応援してくれよ、ハチベエ！」

「も、もちろんでヤンス！」

しかしオイラやカプーズファンの応援もむなしく、カプ

ーズの闘士たちは次々に倒れていった。

ジャイアンズ闘士たちの反則的能力—— // 幻影を見せて

精神力を奪う” 【心的破壊】や // 物理法則を無視する”

ナチユラル・ミスディック

【超神秘大作戦】が常に発動されつづけた結果、カプーズ

の闘士に大ダメージを与えたし、なんとか外野に球を飛ば

せたかと思えば // 一瞬にして外野の闘士が三人から五百人

ほどに増殖する” 【傀儡歌】で、あっさりとお外野フライに

打ち取られ、そもそもカプーズ闘士が打席に立った時点で

// 打者の五感を七秒奪う” 【狂眼死視】、振り逃げからの盗

塁を試みても // 時間が七秒停止する” 【籠鳥籠姫】に

よって、反撃さえも難しくなった。とどめに // 打順が回っ

てきた時点でメンタル状態が生まれたての子猫ちゃん以下

に悪化する” という最低最悪の能力【確定死】が発動さ

れ、もはやカプーズに残された可能性は毛ほどもないかの

ように思われたでヤンス！ なんて卑怯なジャイアンズで

ヤンス！

（でもさつきファウルボールが飛びこんできたのかこつ

けて、試合後にジャイアンズのスター闘士にサインしても

らう約束をとりつけたでヤンス！ やった!）

——そして迎えた九回表。

スコアは三十三対ゼロ（三千とかいう数字は、市民たちの自爆攻撃に審判団がびびったのか、修正されたでヤンス！）。もちろんカプーズは負けてる方でヤンス。残された攻撃回はあと一回。このままでは達也が去勢されてしまうでヤンス！ さあどう戦っていくでヤンスか！？」

「ここをゼロ点で抑えれば……あと一回、残された攻撃チヤンスでなんとか三十四点取って、俺たちカプーズの勝ちだ……！！」

言葉は勇ましくても、達也は相当精神的に参っているようでヤンス！ それもそのはず、大正義ジャイアンズ打線（チーム打率六百割。なぜかというと百パーセント（十割）打ち、あとの五百九十割で相手チームの誰かを葬り去るから）の前に、八回も投げていれば消耗がパナイのもしかたがないでヤンス！

「ハハハ……ヤーキウは楽しいな……ヤーキウは楽しいな……馬鹿野郎、おめえ俺は勝つぞ……ああああああああ去勢去勢去勢去勢去勢去勢去勢ストリーム！ ワアオ！ 去勢ストリームカミングスーン！」

ヤバい！ 達也の精神はすでに限界だ！ だ、誰か居ないでヤンスか！？ もうさつきみたいな市民でもないでヤンス！ 誰か達也を、カプーズを救ってくれでヤンス！
「——ばつかみたい。そんなふうに叫んでたら、相手から舐められるよ」

「!?」
アアッ！ なんていうことだろう！ 次の瞬間、観客席から飛び降りてきたのは、

「何か来る……鳥……？ いや人か……？ アアッ！ マウンドに！ マウンドに！ ヤーキウ神もとい聖アガはまだカプーズを見捨てていなかったーッ！ 皆さん、すでにご存知ですね！ この美少女フェイスの彼こそ、カプーズ背番号一番・サダ闘士ッ！」

——カプーズのユニフォームを着たサダさんだったのだ！

「もう、彼じゃないよ。去年、セルフ去勢ストリームした」
「な、なんと噂は本当だったのか……！！ サダ闘士ほどの者がセルフ去勢なんて……！！ 気がふれたのか……！」
「極度のマゾヒストじゃないの？」

「なんだか変態に見えてきたわ……」

クスクス……クスクス……。

応援席の美少女チアたちが、堂々と悪口を言っている。

わ、悪口ならせめてひそひそやれでヤンス！

「オイコラア！ サダ！」

ヒイ！ すさまじい勢いで達也が走ってきて、サダさんの首を絞め上げているでヤンス！ 早く止めないと！

「お前よくカプーズナインの前に顔出せたもんだな、この裏切り者！」

「や、やめるでヤンスよ、達也！ 暴力はいけないでヤ」そ
うだ！ やめる達也！ 話を聞け！」

そのときだった。オイラがベンチから飛び出すよりも早く、さっきのサダさん同様——いや、複数の人間がどさどさと観客席から飛び降りてきた。その数、およそ……ええつ数えきれない！ たぶん百人は超えてるでヤンス！

「お……お前らはサダのかぞ……くじやない奴も混ざってるな……って野村先生!？」

わずかな沈黙のあと、「野村先生」と呼びかけられた初老の男性が達也の前に進み出た。

「覚えていてくれてうれしいよ、達也。最後に会ったのは何年前だろうかね」

「先生にお世話になったのは、中学時代なんで十年前くらい……ですかね……でも、なんで今先生がここに？」

「君を止めに来たんだよ、達也。サダくんに手を出すことは許さん」

「……先生のおっしゃることであっても、聞けません。ヤ
ーキウ闘士として、カプーズメンバーとして、何より人間として……サダのやったことは許せないんです」

「サダのやったこと？ はて、サダが何かしたかな。私の目には中学時代同様、優しくて賢いサダにしか見えんが」

「ご存じないのでるか、先生!？ こいつはカプーズで将来を囑望されながら、誰にも相談せずセルフ去勢、かつライバルであるジャイアンズに奔った裏切り者なんですよ!」

「誰にも相談せず、と言ったね。誰にも相談できなかった、のだとしたら、どうする？」

「え……?」

達也の漏らした声に応えるように、小さな影が人垣を押しわけて出てきた——まだ幼い男の子だ。

「お前は……サダの弟……」

「サダ兄ちゃんは僕の難病を治すため、懸命にカプーズで投げていたんだよ。でも、お金が足りなくて……ジャイアンズと、ある取引をしたんだ」

取引？

「——『セルフ去勢し、なおかつジャイアンズにその身を捧げれば、弟の治療費は出す』という取引だった。兄ちゃんは僕を救うために、すごく痛い思いをして……。ジャイアンズから提示された条件には『事情を誰にも話さないこと』というのもあったんだ、だから相談なんてできるわけないじゃないか……」

な、なんだってーッ!?

「なんてことだ……なんてことだ……」

がくり、と膝をついた達也の前に、さらに違う人物が進み出る。今度はかわいらしい女の子だ。

「あ……お前は……サダの妹……」

「難病を患っていたのは、この子一人じゃなかったの。アタイも、だったから……サダ兄ちゃんはアタイのために去勢を……」

「君の分も!？」

ザザッ!

達也を取り囲むように、たくさんの人間が進み出た。

「元・ヤーキウ闘士だった者として、何よりも父親として、サダを見守りたかった、それなのに病気が邪魔をして……見守るどころか、サダを思いつめさせ去勢させてしまった」

「家族を救ったサダを産んだことは誇りだわ……かくいう私もサダに助けられた身……」

「おお……もう……!？」

つ、つまりサダさん以外の家族は難病を患っていて、サダさんは皆の命を助けるために去勢したということですか!? アンビリバーボーでヤンス!

「サダさんが救ったのはサダさんの家族だけじゃないです。近所に住んでいるだけの俺も、あ、田中太郎です……以後、よろしく……俺もサダさんの去勢によって、長年患っていた難病を……」

えっ。

「中学時代、サダを教えたことがある、というだけの私も、サダによって治療をつづけることができたんだ……今では

すっかり健康な体になったよ。これも全て、サダのおかげ」

「ブンブブーン！（羽音）」

なんだこのカブトムシ？

かぶとよしお

「紹介が遅れたね、僕はカブトムシ愛好家の甲好雄。こっちはカブトムシのカブくん。サダくんとは特に知り合いでも何でもないけど、僕とカブくんの病気も治ったんだ」

は？ ……いい、いやそんなことは問題じゃないでヤンス。

つまり、サダさんは自らを犠牲にして、見ず知らずの人間までいや、人間の枠を越えて、昆虫の病気まで治したってことでヤンスか……!!

「ブンブブーン（訳…サダさんマジ天使）」

ああ！ カブトムシまでサダさんを称えているでヤンス！ なんとという天使！ サダさんマジ天使でヤンス！

「すまん！ 今まで俺、お前のことを完全に誤解して、暴言を吐きまくってしまった！ 本当に……」

全てを知った達也が、苦しい表情を浮かべ、すごい勢いでサダさんに土下座している。やういオヌシのせいでサダさんは傷ついたでヤンスよ！

「いいよ、別に。ボクも説明不足だったし」

そんな達也にサダさんはすつと手を差し伸べ、無理矢理土下座をやめさせた。立ち上がったにも関わらず、サダさんの顔を直視できない達也に、サダさんはほう、とため息をついた。

「それより顔を上げなよ、達也。まだ試合中だろう？」

「えつまさかサダ、お前」

「カプーズの救援に来たんだよ。今日でジャイアンズへの奉仕契約は終了したからね」

「……………!!」

みるみるうちに達也の瞳に希望が戻る。

そうか、そうだ！ 真相が明らかになっただけじゃなく、契約が終了したことによって、カプーズ不動のエース・サダさんが戻って来たんだ！

「さあ！ 早く準備をして！」

「あ、ああ、わかってるさ、サダ！ 何しろお前の球を受けられるのは、俺しか居ないんだからな！」

いそいそと準備をする達也。なんてうれしそうな笑顔！
「ふふっ」

はにかんだように笑うサダさん。ああ、オイラの好みど

真ん中！ そんなもってノーパンなんて最高でヤンス！

「やっぱりサダがナンバーワン！ ノーパン万歳！」

「やっぱりサダがナンバーワン！ ノーパン万歳！」

さっきまでサダさんの悪口を言っていたチアガールが、一転して応援をはじめた。球場全体が揺れている。歓迎しているんだ。エースの帰還を！

——オイラは目を開けながら、夢を——奇跡を見ているでヤンスね？ こんな奇跡って、すごすぎるでヤンス！ やっぱりやさきゅ……いや、ヤーキウは最高でヤンスね！

・・*・*

試合終了！ 三十三対四で、カプーズの勝利！

最終得点はジャイアンズが三十三点。カプーズが四点。

しかし、カプーズは勝利した。なぜか？ それは……。

「それではヒーローインタビューの時間です！ まず相手闘士を全て葬り去った、今回の試合最大の貢献者・サダ闘士！」

サダさんの「打席に立った闘士を、全て亜空間に消し飛

ばす」【^{マイン・タイル}三千世界之八咫鳥】の威力が十分に發揮されたからだ。いくら得点上を行こうと、闘士が全て亜空間送り

になつてはゲームをつづけられるわけがない。そして達也の【^{ライゼ・ライゼ}絶対防衛マジノ線】——……「【^{マイン・タイル}三千世界之八咫鳥】

の能力適応外に身を置くことができる」も勝利に大きく貢献した。いくらサダさんといっても、球を受け止めてくれる捕手が居なければ活躍することはできない。逆に達也も

サダさんが居なければ、最高球速マツハ百二十程度の（オイラもだんだん単位の感覚が狂ってきたでヤンス）平凡な投手でヤンス。『お前の球を受け止められるのは、俺しか居ないんだからな！』という達也の言葉は嘘ではなかった。

——そう、達也もプロヤーキウ闘士。けっして暴言を吐くだけの無能というわけではなかったでヤンスね。

「よっしゃー勝ったぞ！ ジャイアンズのことだ、バイオ技術で次の試合までに闘士を増殖させてくるだろうが、そうはいかねえ！ 全部サダと俺とで消し飛ばしてやるのさ、なあ、サダ！」

「ああ、そうだね」

くうう！ ベンチから見てるだけのオイラもなんだか泣

けてくるでヤンス！ ふとしたことで離れてしまった友の誤解が解けて、また一緒に戦える日が来るなんて……まさに「王道を往く」の青春でヤンスね！ うんうん！

「ここでグッドニュースがあります！ コールドスリープ被験者・ハチベエさん！」

「ん？ オイラ？」

「貴方は特別に聖アガガのはからいによって、窒素式タイムマシンの使用を許可されました！」

「つ、つまり……」

——も、元の時代に戻れるということかヤンスか!?

「わあ〜い！ や、やったでヤンスよ！」

喜びを爆発させるオイラに、カプーズナインが胴上げのため、走り寄ってきた……！

・・*

「というわけで、ハチベエ。これでお別れだな」

「ハチベエ、君ともっとお話ししてみたかったよ」

タイムマシンに乗りこむオイラの見送りを許されたのは、

達也とサダさんの二人だけだった。なんだかさびしいような気もしたでヤンスが、窒素式タイムマシンが設置されている場所自体が、聖アガガの支配する政府機関中枢にあたるらしく、普段からなかなか人の出入りを許されないらしいでヤンスからしかたないでヤンスね。

「二百年前の世界でも、ヤーキウをがんばってくれよ？」

「もちろんでヤンスよ。達也もプロやきゅ……ヤーキウ闘士としていつまでも活躍するでヤンスよ。あと人の話はちやんと聞けでヤンス」

「ふふっ、ハチベエ。これは痛いところ突かれちゃったんじゃないの」

「うう……サダ、まだ怒ってる、よな？」

「そんな怒ってないから、ボクって根に持つタイプじゃないし。じゃあね、ハチベ……」

「時間です」窒素式タイムマシンの扉が閉まり、そこで二人の声は聞こえなくなった。全自動操縦らしく、白い卵型のそれにはオイラ以外の人間は乗っていないかった。シートベルトが閉まり、中が暗闇に満ちた瞬間、オイラは猛烈な眠気に襲われ、目を閉じた……。

・・*

——夢を、見ていた。

あれが現実だったのか、そうでなかったのか、今となつてはよく覚えていない。試合が終わったあと、オイラはこつそり一人ロッカールームに居るサダさんに近づいた。なぜか……ああ、今なら言える。サインを貰うため、歓心を買おうとしただけの行動だったでヤンス。

『サダさん、オイラ、サダさんのことを尊敬するでヤンス』
『……どうして？』

サダさんは、あの不思議な猫目をばちくりさせ、そう聞き返してきた。面倒なことになったな、と思ったでヤンス。『ありがとう』とでも適当に流してくれば、そのまま『サインしてください』につなげられたのに、今日見ているかぎりではサダさんはそういう淡泊な性格だと思ったのに……当てが外れた——ああ、だから本当の理由を答えざるをえなくなったんだ。

『そ、そんなの簡単でヤンス！ 他人のために自分を犠牲にしたところでヤンスよ！ しかも痛くて痛くてたまらな

い方法を選んで……』

『……確かにボクは父親と母親と兄と姉と弟と妹と従弟たちと近所の田中さんと中学時代の担任の野村先生と（中略）カブトムシのカブくんが患っている難病の治療費を稼ぐべく、ジャイアンズにセルフ去勢した上で身売りにしたけど、それがどうかしたの？』

そんなことを言われたら、能天気な『サインください』なんて言えるはずがない。

『ほ、本当に……頭が下がる行為でヤンス……昆虫のカブくんまで救うなんて、サダさんは昆虫愛好協会から何らかの表彰をされるべきでヤンス……やっぱり苦しんでいる人を助けたかったんでヤン』
『違うよ。全然違う』

予想外すぎる言葉に、心がビクリと跳ねたのおぼえている。

え、今、サダさんはなんて言った？

『そりや皆を助けたいって気持ちにはあったよ。でもそれは第一の目的じゃあない』

さぞかしオイラは間拔けな表情を浮かべていたのだろ。サダさんは『面白い顔するんだね、ハチベエ』と言っ

てオイラの頭を撫でた。

『ふふ、そんな驚いた顔しないでよ、教えてあげようか。』

『ボクの本当の目的』

間抜けな声を漏らすオイラに、次の瞬間、サダさんとはとびきりの笑顔で告げた。

『ボク、達也のことが好きだった。だから、ずっと一緒に居たくって！』

茶髪ボブ高身長スレンダー猫目な美少女が、顔を赤らめながらそんなことを言っている。普通なら大歓迎される台詞でヤンスが——この娘は——この子は——セルフ去勢した結果こうなったのであって——一年前までれっきとした男で……。

『セルフ去勢したときね、ボクはとても充実した心地だったんだ。皆、痛い痛いって騒ぐらしいけど、痛覚を忘れるくらい、嬉しかったんだ、だってずうっと考えていたから』

——ボクが自分からセルフ去勢を選び、ジャイアンズに奔った本当の理由を知ったときの達也が、どんな顔をするのかってね！

『達也はね、バカがつくぐらいおひとよしなんだよ。そん

な達也が、ボクが他人を救うために、気持ちを押して殺して、セルフ去勢を選んだと知ったら、ねえ、どんな行動を取ると思う？』

『……きつと今までの行いをサダさんに謝るでヤンス』

『それだけじゃないよ、ハチベエ。達也は自分の発した言葉の責任を取って、ボクの望み通り、ずっとボクと一緒に居てくれる。ずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっととずっととずっとと……死ぬまで。いや、死んでも』

『ヒツ……』

『だからボクは時が来るまで黙っておこうと思った。達也に罵られるたび自殺を考えただけど、でも、この瞬間が来るまでは耐えようって、この瞬間のためなら苦しみも耐えられるって、そう考えた』

ク、ク、ク、クレイジー！ クレイジーサイコ野郎！

だけどサダさんは美少女すぎた。

夢見る乙女のようなキラキラした（狂気じみた）瞳で、語るサダさんは、確かに美しかった。逆にここまでのビジュアルでなければ、オイラも悲鳴を上げて逃げていたことだろう——だがオイラは逃げられなかった。アアン！ 好

みど真ん中！ 男じゃなければ、即座に交際を申込んでいた！ 芸能界でも十分やっていけるビジュアル！ 惜しい！ あまりに惜しい！

——なぜ天はサダさんに達也とかいう無能マツチョ野郎をあてがったでヤンスか!?

『……ねえ、ハチベエ？ 君がもし、このことを達也に言うのなら、君が達也の先祖であったとしても……』

『言わないでヤンスよ。サダさんの気持ちはよくわかったでヤンス。オイラはそこまで無粋な男じゃないでヤンスよ』

『……約束、してくれる？』

『するでヤンス』

なら、いいの。とサダさんは背を向け、オイラにもう行っていいよとつぶやいた。

『サダさん……サダさんは、カブーズが……ヤーキウが好きでヤンスか？』

『なんでそんなこと聞くの』

『サダさんの気持ちはよくわかったでヤンスけど、プロやきゅ……ファンとして、やきゅ……選手を目指す者として、そこははっきり聞いておきたかったでヤンス』

『……そうだねえ。カブーズというチーム自体はあまり好きじゃない。ケチだし、あまりよくない人たちの付き合いが深いし。あのままじゃ、枯れ木に山が潰され”る。でもヤーキウは昔からずっと大好きだったよ。もちろん達也の方が大切だけど』

『サダさん、もうひとつ聞いていいでヤンスか？』

『なんなりと』

『どうしてほぼ初対面のオイラに、さっきみたいな大事なことを打ち明けたでヤンス？』

『………なんでだろうね。わかんないや』

サダさんは苛立ちの表情を隠そうともせず、そう言った。

『あ、じゃあ、オイラはここで……今日はどうもありがとうございました』

サインをもらうのはもうあきらめよう。

オイラが背を向けて帰ろうとしたとき。

『ああ、そうだ』

——君、ちよつとだけ達也に似てるんだ。そう、そんな風に驚いた顔とかね。二百年も前の人なのに、面白いな。振り返っても、もうサダさんの表情は読めなかった。

・・*

「ここは……？」

次に目が覚めたその先に広がるのは、オイラが知っている光景ではなかった。真つ白の壁、真つ白のベッド。真つ白の布団、薬品めいたにおい。壺素缶は見当たらない。ん？なんで今オイラ壺素缶のことなんか……。人の気配がなく、やけに無機質な空間。ああ、病院、でヤンスか。でも、なんでオイラが？ ……心当たりは、あった。練習試合の帰り、いつもの横断歩道を渡ろうとした瞬間、トラックがいきなり曲がってきて——…あれ？ オイラ、その前に変な夢を見ていたような？ 確か去勢するとかしないと、か、そういう気がふれたとしか思えない内容の夢。で、そこから記憶がない。と、いうことはマンガでありがちな『数日間気を失っていた』というパターンでヤンスかね？ こういうときは、たいていママかアニキがオイラにびったりくっついてるものでヤンスが……あれ？ 誰も居ないでヤンス。飲み物でも買いに行ってるでヤンスか？

「まあ、いいでヤンス。オイラが目覚めたのを知れば、涙

涙の感動展開が「ハチベエ、大丈夫でゴザルか？ ワレは心配で撮影抜けてきたでゴザル！」

「アニキ！」

オイラの予想通り、アニキはちょうど飲み物を買いにでていたらしい。右手にはジュースの缶が握られていた。

「アニキ！ 今度の撮影のギャラはどれくらいでヤンスか？」

「三十分で五万！」

「さすがアニキ！ かつこいいでヤンス！」

「おお！ ハチベエ！ 目が覚めたでソウロウ！」

「パパ！」

「ハチベエちゃん！ ママは心配したでオジャル！」

「ママ！」

次々に家族がオイラの生還を喜んでくれた。皆が皆、右手にジュースの缶を握っている。連れションならぬ連れ買いでヤンスね！

「オイラ、現代に戻れた……ということは、ここは去勢ストリームが存在しない世界ということでヤンスか？」

「去勢？ ハチベエ、性癖ハードすぎてゴザルよ！」

「あ、いや、オイラの性癖じゃなくてッ」

「ハチベエちゃん……まだ中学生なんだから、兄者のビデオで我慢しなさいでオジャル」

「マ、ママ、違うでヤンスよ！」

「ははっ、さすが吾輩の息子でソウロウ！」

「パパー！ 誤解でヤンスよ！」

あれやこれやと騒ぐ家族の気を逸らすため、オイラは病室の窓を開けた。抜けるような青空がどこまでも広がっている。ああ……今日はずっと……ヤーキウ、いや、野球日和でヤンス！

「そんなことより野球やろうでヤンス！」

テンションが上がったオイラは、思わず壁に立てかけてあった愛用のバットを手に、窓から外へ飛び出した……！

「ああ！ ハチベエちゃん！ ここは十二階よ！」

やっぱり野球がナンバーワン！

(おわり)

※この小説はフィクションです。実在の人物や団体などとは一切関係ありません。

※登場人物たちがプレイしているのは野球ではなく、あくまでもヤーキウです。

※二〇一四年現在、去勢ストリームは許されていません。何らかの罪にあたる可能性が大(傷害罪?)です。万が一あなたが去勢ストリームに目覚めたとしても、作者やサークルは責任を取ることができません。自己責任でどうぞ。

★個人的『仁義なき戦い』シリーズ登場人物ベスト3★

3位…大友勝利(理由…つよいから)

2位…広能昌三(理由…かつこいいから)

1位…山守組長(理由…「小動物のような愛らしいフェイスで」お前が出所したらわしの全財産あげるけん」↓「いざ出所すると」そがな昔のこと誰が知るかい」すつとぼけぶりがほんとすき)

第三回突貫企画工事号

2014年10月27日発行

編集人 渡科由太

印刷所 広島大学文団BOX